

ドナウの四季

2009年・春季号・No.2

『ハンガリー人』の翻訳を終えて	稲川 照芳	1
ブダペストと定年	天野 明	2
さらばハンガリー	山田 進	3
音の旅人	芦川 紀子	4
ハンガリーの息遣い	城島 高明	5
ハンガリー語著書出版に寄せて	盛田 常夫	6
ハンガリー履歴書	サーライ東口美登里	8
緑の丘日本語補習学校	フルディ満名実	9
スクカーレーク・イリン		9
留学生自己紹介		
浅井 高平・景山 靖子・藤川 摩耶・中村 美貴・藪 香苗		10
コンサート情報	桑名 一恵	13
運動サークル活動状況	飯尾 欽哉	14
2009年ゴルフ部活動	町野 憲善	14
釣りサークル	野村 英陽	15
テニスサークル	的場 英門	15
ランニング情報		15
お知らせ		16

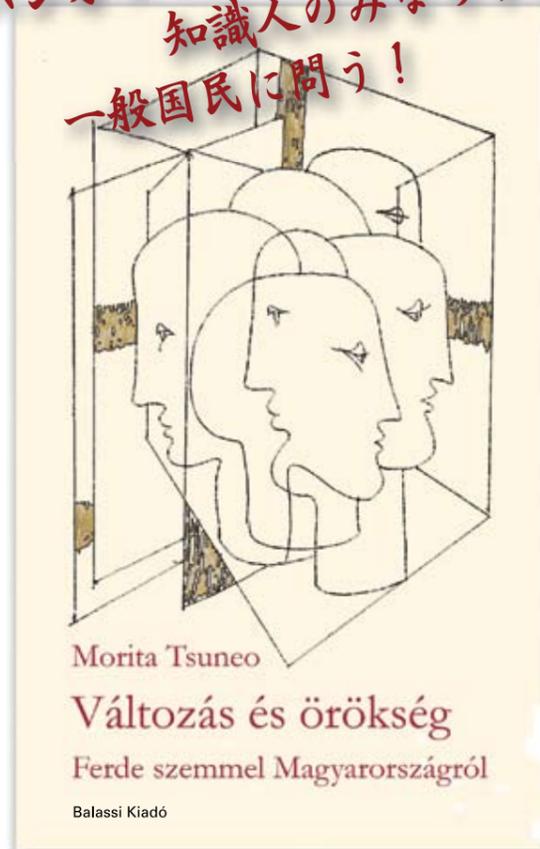
Valtozás (change) és Örökség (legacy)

Ferdeszemmel Magyarországról

ハンガリー人は自らの立場を誤解していないか。外国企業と外国資本に依存し、自立精神を失ったハンガリー人は、「借り物経済」の中で、お客さんのように「ゲストワーカー」になっていないか。政治家はGDPの5割を手中にし、市場経済を「国庫化」する「国庫資本主義」の道を歩んでいないか。

政権政党のみならず、野党が陥る便宜主義とポピュリズム。借り物経済、ゲストワーカー、国庫資本主義のキーワードで解明するハンガリー社会分析。大反響を呼んだ「国庫資本主義」論を中心にハンガリー社会の病根を抉る。キリギリスから蟻にならなければ、ハンガリーの浮揚はない。

ハンガリーの政治家、
知識人のみならず、
一般国民に問う！



ハンガリー書籍フェア出品作品
4月刊行、予価2600Ft、予約受付中

„Ferde szemmel” --- szellemes alcím, de csak félig állja meg a helyét. Igaz, Tsuneo Moritának japán arca van, de a szíve és az agya csak félig japán. Félig már hozzánk tartozik. Nem csak azért, mert évtizedeket töltött Magyarországon és megtanulta nehéz nyelvünket. Azért is, mert sok szempontból belülről éli át azt, ami ebben a országban és határainkon túl, a poszt-szocialista régióban történik. Egyszerre néz ránk életünk résztvevőjeként, azonosul problémáinkkal – ugyanakkor megőrzi a külső elemző tárgyilagosságát, és a Japán fejlődés alapos ismerete, a nemzetközi összehasonlítás tovább növeli fejtegetéseinek magyarózó erejét. Sok állítását, köztük nem is egy kritikai észrevételét meggyőzőnek és tanulságosnak tartom, bár vannak olyan gondolatai is, amelyekkel nem tudok egyetérteni. Nyugodt szívvel ajánlom a könyv elolvasását. Morita minden írása érdekes, tartalmas, gondolatébresztő.

Kornai János, A közgazdaságtan emeritus professzora, Harvard University és Collegium Budapest

目次

A rendszerváltás és a magyar társadalom

(第1部 体制転換とハンガリー社会)

1. A rendszerváltás filozófiája
体制転換を哲学する
2. A kincstári kapitalizmus
国庫資本主義
3. A kölcsönvett gazdaság és a vendégmunka jelenség
借り物経済とゲストワーカー現象
4. Populizmus és pragmatizmus
ポピュリズムとプラグマティズム
5. Az állami kitüntetés és a történelmi értékelés
国家叙勲と歴史の評価
6. Nem minden változtatás reform
すべての変革は改革にあらず
7. A reform arroganciának veresége
改革アロガンスの敗北
8. Figyelm és fegyelm hiánya
規律と注意力の欠如

Könyvvilág

(第2部 書物の世界)

9. Marx György, A marslakók érkezése
『異星人伝説』 訳者後書き
10. Kornai János, A gondolat erejével
『コルナイ自伝』 訳者後書き
11. Kornai közgazdaságtan
コルナイ経済学をどう理解すべきか

Filmvilág

(第3部 映画の世界)

12. A Beautiful Mind
ノイマンとナッシュ
13. Sicko
何を学ぶべきか
14. Taking side
歴史の犯罪とどう向き合うべきか

『ハンガリー人』の翻訳・出版を終えて

稲川 照芳

『ハンガリー人』との出会い

足掛け3年近くかかかって、やっとレンドヴァイ氏の名著『ハンガリー人』(Die Ungarn – Eine tausendjährige Geschichte)の日本語訳が完成、出版にこぎつけた。600ページに及ぶ大著の翻訳を思い立った経緯などを記してみたい。

2003年末にハンガリーに着任して間もなく、ウィーンの本屋に立ち寄り、ドイツ語のものでハンガリーの歴史を知る本を探してみた。本屋の店先に見慣れた名前がふと目についた。それがレンドヴァイ氏の『ハンガリー人』であった。同氏は私がオーストリアに公使として勤務していた当時、東・中欧情勢について意見を伺った人である。

ハンガリーに赴任した大使には三つの大きな行事に参加する義務がある。3月15日のオーストリアに対する革命記念日、8月20日の建国記念日、それに10月23日のハンガリー革命の式典である。いつも先ず国会議事堂の前に整列し、一連の儀式に参加した後、3月は国立博物館前に直立不動で革命の寸劇を観る、8月のそれはお祝いそのものであり、10月の記念日は夕刻ナジの墓前に花を添える。これらの行事に参列し、ハンガリーの歴史の一端に触れ、国内を視察しているいろいろな人々の話を聞くにつれ、神話の時代から、定住、中欧の大国、モンゴルの来襲、トルコの占領、ハンガリー領の事実上の3分割、トランシルバニアの重要性に触れ、オーストリアの支配、二重帝国の時代、第一次・第二次大戦、戦後の共産党独裁、ハンガリー革命を経て緩やかな改革から体制の崩壊の歴史に関心を抱くようになった。レンドヴァイ氏の著作は、このハンガリーの歴史を、マーチャーシュ国王、女帝マリア・テレジア、セーチェニ、コシュート、詩人ペテフィ、皇帝フランツ・ヨーゼフ、皇后エリザベート、アンドラーシ、ホルティイ提督、ラーコシ、イムレ・ナジ、カーダールなど歴史上の人物の叙述によって展開しているので、解りやすく面白い。また、ハンガリーにたいするドイツ人、ユダヤ人の強い影響力を叙述しているところもたいへん興味深かった。このような著作はハンガリー史への絶好の道しるべであった。レンドヴァイ氏は56年革命の後オーストリアに亡命し、40

年間ウィーンでジャーナリストとして活躍し、客観的にハンガリーを見つめることのできる人である。

この著作を在留邦人の人々にも読んでもらいたかったが、残念ながらドイツ語で書かれているので容易ではない。しかし、是非、日本の方にもハンガリーの歴史をよりよく理解して欲しいと思い、ドイツ語が多少出来た私が翻訳を思い立った次第である。

翻訳開始から出版へ

実際に翻訳を始めたのは、2006年5月頃である。ワープロを使っていなかった私は、まずワープロに慣れるという、今の若い人にとっては信じられないことから始めなければならなかった。休日を利用して、翻訳作業が始まった。

そうこうしているうちに、2006年11月に帰朝命令が出て、10月革命50周年の日本代表を務めたのを最後に帰国した。

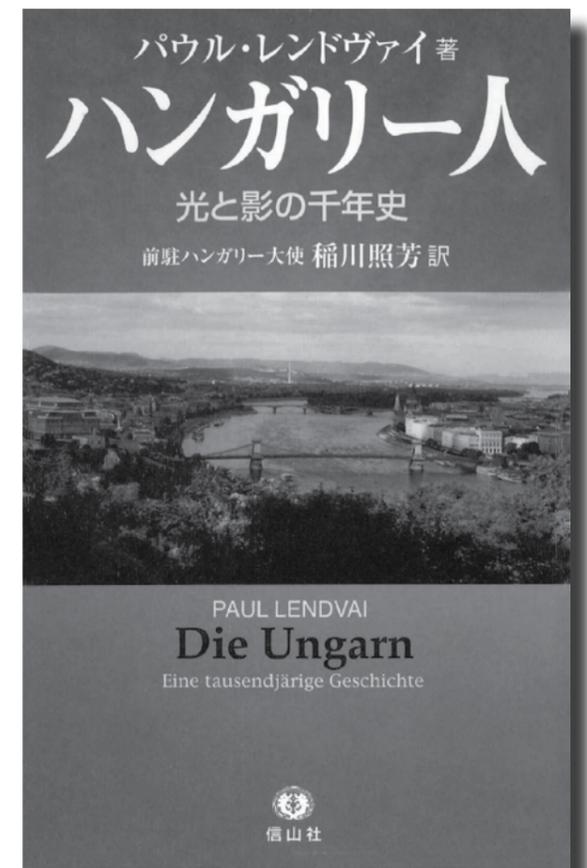
帰国して退官したが、問題は翻訳本の出版社を見つけることであった。殆んど日本を離れていた私には、出版界とコンタクトは全くなく。他方、ハンガリーの歴史に興味のある出版社がおいそれと見つかるわけがない。引き受けようという出版社がいても私の財力では到底かなわなかった。やっと見当をつけたのは2007年の夏である。レンドヴァイ氏も出版に協力してくれ、ハンガリーの文化財団からの出版支援に労をとってくれた。ヒレル文化大臣との友情も役に立った。そして、漸く出版会社と契約したのが、2008年7月である。

校正の苦勞

とにかく日本語で550ページの厚い本である。校正が3度あり、その都度、自分が訳したものなのに、正直

なところ文章修正の苦勞は並大抵ではなかった。とくに、三度目の校正を軽く見たのが、その後の大きな誤りの発見の原因であった。見本は2008年暮れに出来上がったが、写真の頁と本文にまだ多くの誤りがあった。なかでもオーストリアがオーストラリアになっていた。lyをドイツ語流に「リ」としたのがそうである。この失態に夜も眠れない年を越さねばならなくなり、年明け早々出版社編集部の渡辺さんをお願いして訂正していただき、なんとか今年2月の発刊となった。

出版を終えて、お世話になったハンガリーの国、友人・在留邦人の皆さんに私なりの方法で多少なりとも恩返しできるのではないかと考えている。日本とハンガリーは今年国交樹立140周年を迎える。これを機会に、ハンガリーの専門家が一層歴史の発掘をしてくれることを期待している。



ブダペストと定年

天野 明

この3月に8年ぶりにブダペストを訪れた。1月末に定年退職し、夏には帰国することになったので、無性にブダペストに行きたくなった。アテネから機中、眼下にバラトン湖、ドナウ河そして鎖橋が見えた時、22年前の1987年6月、前年起こったチェルノブイリ原発事故のため1年間延期となっていた赴任で、ツボレフ機上から一心に下を見ている自分を思い出し、懐かしさが急に親しみに変わっていった。当時、フェリヘジ空港の周り是一片ひまわり畑で、自分の背丈より高い鮮やかな黄色の海に息を呑み、市場開拓と事務所開設という身に余る使命感で緊張していた気持ちがずっと奥に溶け込んで行ったのを覚えている。以後4年間の日本滞在を挟んで、ハンガリー・イギリス・ギリシャと合計18年を超える海外勤務の始まりとなった。

思い出が経過した時間と馴染みの家並みと出会った人たちの関数だとすると、駐在地の中でハンガリーを第二の故郷だと思っている自分に納得する。出張では幾つもの国を訪問したが、ハンガリーは異文化の中で生活した初めての地、何物にも変えがたい体験をさせてもらったからだろう。ハンガリーには1989年の体制変換を挟んで7年間を駐在員として過ごした。当初は美しい街並みをうつむき加減に歩く市民の姿が印象的だった。ABC(スーパー)の棚にある商品の品揃えは少なく、トイレトペーパーも中国製のゴワゴワとした紙を四角く切ったものしかなかった。冬になると生野菜は姿を消し、外資系ホテルにあるレストランのメニューも小さくなってしまふ。単身の一年間で栄養不良となったが、妻が2歳と3歳の娘と一緒に来てくれてからは、体調が戻った。主に出張者に供することになる食料調達のため二ヶ月に一度はウィーンまで車で買出しに行き、皮肉なことにハンガリー産の肉・野菜を買って帰ることもあったが、一方、小さな日本人社会では情報が素早く交換され、偶に市場に出るバナナや、ハンガリー人には余り人気の無い蟹缶やキャビアを安く入手できることもあった。公私にわたり便利な日本との違いを痛感することは多かったが、一般市民に比較して、駐在員の持っている特権を享受していたことも確かであ

る。外貨を持ち、必要なら外交官専用店で買い物も出来、赤いHのついたプレートのお陰で車は実質何処でも駐車可能。国境では長い列を横目で見ながら別のゲートに滑り込めた。

当時、日本人が少なかったので、日本人社会では殆どの人が何らかの役割を担っていた。我家の場合、娘二人が日本人補習校の小学部に入学してからは、先生方やお母さん達と予算やカリキュラムの打ち合わせをしたり、運動会や餅つき大会の準備、バラトン湖への泊り込み遠足では引率の手伝いをしたりしたこともある。今でもわが子たちは、先生方やお母さんの笑顔に囲まれた補習校時代の友達と何かあると世界のどこかで集まっているようだ。



兎に角、厳しい生活の中に手作りの温かさがあった。何度もハンガリーの人たちに助けていただいた。今でも忘れられないのは、家族を連れてショブロン地方にドライブに行き、近くの湖畔で休んでいた時、急に雨が降り出し、慌てて車に戻った。ブダペストへの帰途、妻がハンドバッグを忘れたことに気づいた。慌てて取って返したが、何処にも見つからなかった。パスポートも入っていたので、再発行のことなど考えて気が重くなった。その夜、玄関のブザーが鳴るので、出てみると上品な初老の夫妻が立っていた。「バッグの中を見たら、子供向け人形劇の切符が入っていて、その日時が明日だったので、きっと子供たちが悲しがらるだろうと思って」というのである。後日、改めてご自宅を訪ねた折、我々の観劇に間に合うように自分たちの旅行を途中で切り上げて届けてくれたことが分かった。また、ハンガリーに来て間もない妻が幼子二人を連れて、イシュテンヘジの山中で日が暮れて迷ってしまった時には、偶然通りかかった人が疲れ切った子供を背負って山を下りてくれた。さらに、途中で車が止まってくれて、バトンタッチし

て我家まで送り届けてもらったこともある。私がブリーフケースを道端に置き忘れてしまった時には、近くの工場の門番が見つけて保管し、翌日事務所に届けてくれたこともあった。こうしたことは、私にとっては何処でも無い、確かにハンガリーでだけ起こったことなのである。

今回は3泊と短い滞在であったが、15年ぶりに当時の職場の仲間が集まってくれ、「あの頃が、人生で一番仕事のやりがいがあり、楽しかった」といつてくれたのは嬉しかった。しかし、特に2000年以降のハンガリーを総括して、異口同音に「Worse offだ」と明言したことに衝撃を受けた。新聞でハンガリーの政治経済が危機的状況にあることは理解していたが、これまで何度かの「東欧危機」を乗り越え、1956年にソ連の戦車に蹂躪された時でさえ、ハンガリー中央銀行はウィーンに疎開し、外債返済を継続したという先達の矜持を失ってしまったのかと、その不甲斐なさを残念に思う。変革後間もなく多数輩出した、私の知っている若い起業家達は目を輝かせて将来を語り、懸命に働いていたし、市民は、不安はあるがそれでも期待に燃えた表情を見せ、確かに顔を上げて歩き始めていた。勿論、民営化に伴う汚職やマフィアの暗躍も芽吹いていたが、こんなに汚職まみれの中で没落しようとは思っても見なかった。到着そうそう市民の表情に疲労の影が見えると感じたのは思い過ごしではなかった。

そんな複雑な思いを持ちながら、飛行場に向かう帰りのタクシーの中で振り返ると、エリザベト橋が視界から消え、カルヴィン広場やウールイ通りの高架を過ぎ、見慣れた景色がドンドン後ろに飛んでいく。まるで皮膚が一枚一枚はがされていくような気がして、飛行場では暫く茫然としていた。アテネに向かう飛行機の窓から下を見たが、雲にさえぎられ、あっという間にブダペストの街は見えなくなってしまった。なるほどこれが現実かと夢から覚めたような気がして、ハンガリーに別れを告げた。すると、定年後の道標が見出せずに自信を失いかけていたが、「さて、日本では何が待ち受けているのだろうか?」と、なんだか期待のようなものがふつふつと沸いてきた。

さらばハンガリー

山田 進

と一つの謎となる。

ドナウ川を見下ろすゲッセルルトの丘から見る夜景は実に素晴らしい。鎖橋や王宮などがライトアップされ、光り輝くペストの町は何回見ても感動する。この夜景は客人や出張者には欠かせない。ここで1回失敗している。普段は無料の観光地であるが、たまたまその日はゲートで行く手が封鎖されており、脇から入ろうとしたらハンガリー語で何か言ってくる。お金を払ってやっと通行できた。後で同僚に聞いてもお金なんか取られたことなどないという。この時はやはりハンガリー語を勉強しなければならないと思ったものだ(その後、2年ほど勉強したが挫折した)。

ブダペストの中心部は古き欧州の臭いを感じさせるが、郊外も捨てたものではない。ハンガリーは黄色がよく似合う。春になると、郊外の畑には菜の花が、夏が近づいてくるとヒマワリが一面に花開く。爽快な夏の日に咲くヒマワリ畑は心を和ませてくれる。そのヒマワリが枯れ、種が黒ずんでくると、もう夏の終わり。

我が社はブダペストから65kmほど東に離れたところにある。毎日、小一時間ほどのドライブで会社へ向かう。小さな村々を通り抜けるのだが、家々や道ばたには季節によってさまざまな花が咲き誇っている。春にはチェリーの赤紫やアーモンドの白い花が綺麗だ。ところが、ハンガリーの同僚たちに、草花のことを聞いても良く分からない。せっかくの話題を共有できないのは残念至極だった。

少々長い通勤道中でいろいろな事に出くわした。田舎道のためか、道路には車にはねられた犬や猫だけでなく、狐や孔雀や雉などの死骸に出会う。誰も片付けられないから、何度も車に轢かれ、腐ったままの状態で放置され、やがて風化していく。二度ほど雀の大群にぶつかった。雀は私の車をよけることなくぶつかり、バックミラーから路上で羽をバタバタさせている様子が見えた。可愛そうなことをした。冬になると、鹿が飛び出して来る。これは大きな事故のもとになる。2匹が次々と飛び出してきて、間一髪で避けたことがある。同僚たちも、一冬に何度か鹿との接触事故を起こす。車のダメージも小さくない。

田舎道ではなぜか車の事故が多い。「なぜ、こんな所で」と思う場所で良く見かけ

た。それも日本ではあまり見かけないような横転事故だ。市街地を過ぎると、制限速度が90kmになる。狭い田舎道でこのスピードだから、少し間違えると大事故になる。私も一度、サイドミラーを一瞬のうちにもぎ取られた経験がある。瞬時の事でミラーとミラーが激しくぶつかる衝撃音だけが聞こえた。田舎道の舗装状態が悪いから、端を避けてセンターライン近くを走るので、気を付けなければならない。

11月になると霧が出る。会社からの帰宅時に、暗い夜道で霧が発生すると怖い。街灯もない曲がりくねった丘陵地帯を時速30kmほどで走る。明かりは車のライトだけ。寒く白い闇の中、突然、道路脇に自転車や人が現れる。冷や汗をかきながら、ハンドルを握り占める。日本ではめったに使わないフォグランプの効用を知らされた。当地では必需品だ。

怖い事ばかりでない。厳寒の朝、山道の枯れ木に氷が華をさかせる。樹氷と呼ぶのだろうか。朝陽に照らされ、光輝くその情景は日本ではめったに見られない。自然の美を感じる瞬間であり、ハンガリーで初めて見たものだ。

ハンガリーの丘陵地帯ではぶどう畑を目にする。ハンガリーはワインの名産地。赤はとくに美味しい。本当に良く飲んだ。フランスの客人がよく来るのでハンガリーワインを賞味して貰う。「まあまあ」といった具合で、やはりフランスワインが一番だと思っ

ているらしい。先般、ロマネのワインを頂いたが、マラティンスキー2003の方が旨い。トカイの貴腐ワインは世界的に有名であるが、あの甘さに評する弁はない。このワインと一緒に食するものにハンガリー名産のフォアグラがある。いろいろな料理法はあるが、フォアグラはソティーに限る、口に入れた時の味わいは何ともいえない。

ハンガリー料理といえばグヤーシュ。これは野菜と肉が煮込まれたスープ。パプリカで味付けされているが、どこのお店で食べてもそれぞれに店の味がある。また、スペインのイベリコ豚はハムなどで有名だが、同じの系統のハンガリー産マンガリツァ豚のしゃぶしゃぶやすき焼きは実に旨い。

こうして慣れ親しんだハンガリーともお別れする時がきた。なんとも寂しい限りだ。ヴィソントラターシュラ・ハンガリー。

音の旅人— 関野直樹のこと

芦川 紀子

関野直樹がイシュテン・ヘジイ通りを登りつめ、ノルマファ近くの緑したたるホルバート家に居を構えたのは2001年夏のこと。同年、新人の登竜門としての飯塚新人音楽コンクールで大賞を受賞し、その海外留学奨励金をベースに留学を決めていた。順調な滑り出しのように見えるが、ピアニストへの道程はいかにも長く厳しい。

筆者と関野の出会いは、1995年のこと。大学の西洋音楽史の履修生の一人であった。レポートについて質問に来た彼は、黒いセーターを着た細身の背の高い、「美しい」という印象の青年であった。それから1年ほどして、ピアノのことで相談に乗って欲しいと電話がかかった。私は元々ピアノ専攻であったが、もはやピアノの教員ではない。その私にピアノの相談である。どうしたら飛躍できるかと悩んでいた彼は、何か別の視点を求めている。助言したり、マスター・クラスを紹介するうちに、大きな転機が訪れた。1998年、関野が大学院1年の時、モスクワのグネーシン音楽院のトロップ教授のレッスンを受ける機会があった。卒業演奏で弾いたリストの「ダンテを読んで」を聴いてもらった。トロップ教授は聴き終わると静かに質問した。

「君は今までどの様にピアノを勉強してきましたか」

彼は5歳からピアノを習っていたとはいえ、本格的にピアノの専門家を目指すような教育は受けてこなかった。練習嫌いで30分練習すればいい方だったという。しかし、発表会やオーディションを受ける時など、リハーサルでは失敗するのに、いったんステージに上がると一番目立つ演奏をしていたという。高校では理系のコースに所属していたが、2年時に受けたコンクールがきっかけで、音楽に進みたいと思った。これでは遅い。しかし彼は日本大学の系列校にいたので、芸術学部に行くことになった。遅咲きのピアニストの第一歩がこうして始まった。独特のステージ感覚と弾きたい思いの伝わる演奏はできて、思い通りの音を出す術がない。そこを見抜いたのがトロップ教授であった。「技」を伝授することは出来ると。1999年3月下旬、だいぶ雪の消えたモスクワに飛んだ。買い物の仕方ひとつをとっても面倒な手間の必要な当時のロシア、毎日

の練習、一日おきのレッスン、5月の連休に戻ってきた彼は7キロも痩せていた。もともとの細身で長身の関野が一層高く見えた。様々なことを詰め込んで頑張ってきたことは分かったが、不消化を起こさせたようで、私は彼をモスクワに行かせたことへの責任を感じ始めていた。

だが、修了試験でリストの「ソナタ 口短調」を弾くことになった。これはチャンスだと思った。30分間休む間もなく弾き続けなければならぬリストの大曲。人間の体と感覚と魂が、ピアノという楽器を通して何をなし得るか、それを追い求めたのがフランツ・リストのピアノ作品であり、ブレンデルによればその最高傑作が「ソナタ 口短調」である。この曲は1853年2月に完成したが、初演は1857年、リストの高弟ハンス・フォン・ビューローによって行われた。その瞬間から音楽界は二つに割れた。もしこの曲が幻想曲として発表されていたならば、議論にはならなかっただろう。それほど伝統的なソナタとは異なっている。しかしソナタ形式を「主題の提示と展開、再現からなる形式」とするならば、三つの主題の提示と変奏、中間に緩やかな美しい楽章を挟んだ大きな三部分構造による単一楽章のソナタといえる。ベートーヴェンの「第九」の第四楽章と同じ意味で変奏されたソナタ形式である。実際、作曲に際してリストは、ベートーヴェンから大きな影響を受けた。

技術的にも、内容的にも、精神的にも演奏困難な大曲を正しく確かなものに出来れば、彼の問題が解決する。この作品を指導してもらえば、友人のリスト音楽院のドラフィ教授以外にはいない。彼はピアノを弾く身体のあり方を真に他人に伝えることの出来る優れた教師である。関野はその夏ウィーンに滞在し、毎週ブダペストに通ってこの大曲と向き合った。12月、修了演奏を終えた彼のために、私は東京オペラシティのライタルホールで演奏会を企画した。これがその後10年にわたるピアニストとしての旅を共に歩むきっかけであった。

2000年夏にはブダペストに滞在し、その秋のワイマールのリスト・コンクールに備えた。彼の地のリスト協会主催で行われたリスト・ハウスでの演奏会を皮切りに、日本とハンガリーはもとより、ドイツ、オーストリ

ア、合衆国、モンテネグロ他で演奏活動が続いた。2004年は特別な年になった。3月の紀尾井ホールでの3回目の自主リサイタルは、音楽的にも技術的にも彼の集大成であり、大きな評価を得た。続く5月のリスト音楽院大ホールでのソロリサイタルは、彼にとって演奏のターニングポイントになった。6月には由緒ある南ドイツのオットボイレンの修道院で圧倒的な演奏を聴かせた。翌2005年3月には、リスト生誕の地ライディングの演奏会に招かれた。オーケストラの響きがすると絶賛されたリストの「死の舞踏」の後に、シューベルト＝リストの「セレナーデ」を弾いた。オーストリア人にとって心の故郷ともいべき曲。人々は息を潜め、そして圧倒的な拍手が鳴りやまなかった。日本での自主リサイタルはすでに7回を数え、その演奏の評価が定着してきた。2008年11月には、デビューCD「リストの世界」をリリースし、レコード芸術2月号誌上で「特選盤」に選ばれた。去る2月28日、ドイツのメミンゲンのKunsthalle で「関野直樹、ハイドン・ベートーヴェン・リストを弾く」と題して、3曲のソナタを演奏した。南ドイツ新聞に取り上げられ、本年11月と来年5月、11年のリスト年にも、すでにドイツでの演奏会が決まっている。08年12月、東京と福岡で演奏したリスト編曲の2台ピアノ版ベートーヴェンの交響曲第9番{合唱}はケマル・ゲキチと火花散る共演だった。今後の海外展開が期待できる。ロンドン、アメリカでの演奏も射程に入ってきた。

練習嫌いの少年はブダペストの素晴らしい環境の中で練習の虫となり、自己改善に血の滲むような努力を重ね、演奏活動を行ってきた。師をして「ステージで特別な演奏効果をもたらすことの出来る演奏家は、100人に2～3人しかいない。直樹はそういう種類のピアニストだ」と言わしめた。世界に評価される演奏を培うことの出来たブダペストでの8年の生活に別れを告げ、彼は今年日本に活動拠点を移す。モスクワと一緒に訪ねてから10年、より一層の飛躍を目指して、共に新たな旅に出かけることにしよう。彼のライフワーク「ソナタ口短調」と共に。

9月にはブダペストでの「さよならコンサート」を予定している。

ハンガリーの息遣い—金子三勇士君のこと

城島 高明

今売り出し中のピアニスト、金子三勇士。手許にあるプロフィールには、1989年生まれとあるから、今年の誕生日でまだ弱冠の歳である。ミュージックを連想させる「みゅうじ」という名前からはご両親の思い入れを感じさせるのだが、三勇士君の音楽才能は、早くからそれに十二分に応えるものだった。

日本生まれの彼は、3歳の頃から誰に習うでもなく自然にピアノを弾き始め、6歳で母の母国ハンガリーへ単身送り出された。厳しい環境に放り出されたというより、ピアノの才能がありそうだと感じたご両親がハンガリーの有名なピアノ教師のレッスンを受けさせたところ、自らハンガリーに残って勉強すると決心したようだ。ヴァーツの祖父母の許からバルトク音楽小学校へ通った。ハンガリーの年代別の全国コンクールを次々と制覇し、5年生で国立リスト音楽院の特別才能児教育ピアノ科への飛び級入学を許された。一時期、腱鞘炎で何ヶ月もピアノが弾けなくなる危機に見舞われたが、その危機を克服してギリシャ、アメリカ・アリゾナ州のジュニア・コンクールで優勝。16歳で音楽院の全課程を修了した。活動の舞台を日本に移してからは、2007年のロン・ティボーコンクールでセミ・ファイナリスト、翌年の第3回バルトク国際コンクールではついに優勝と、ピアニストとしての経歴を着実に重ねてきた。

日本からハンガリーへの音楽留学は珍しいことではない。だが、音楽留学といっても、三勇士君の場合は非常に珍しいケースだ。日本で生まれながら、両親から離れて小学1年生から音楽院修了までを時間をハンガリーで過ごし、その後日本の音楽高校・大学で演奏家としてのキャリアを積むというプロセスを辿っている。日本の中学・高校、音楽大学を卒業してハンガリーにやってくるのとまったく逆である。十代の最も感受性の豊かな時を、欧州の歴史と伝統に浸って音楽を学び、ハンガリー語で教育を受けた三勇士君は、日本生まれのピアニストとしてはまったくユニークな環境で育ったと言えるだろう。

なによりもまず、ハンガリーの日々の生活にあふれる音楽である。ブダペストに住んでいると気づかないが、バラトン湖の周辺、地方にまで足をのばすと、四季折々の祭りに出くわす。目にする歌や踊りの中には、メロ

ディーやリズムがバルトク、コダーイの作品を想起させるものが多い。創作活動のベースをハンガリーとその周辺地域においてこの二人の作曲家は、民謡に対して科学的アプローチを試みた作曲家として知られている。彼らの音楽は、その成り立ちからしてハンガリー語の音韻とも密接に関わりあっている。音と映像が結びついた実体験は記憶に深く刻まれ、楽曲への深い共感と理解に発展してゆくだろう。四季折々の祭りはテレビで放送されることもある。身近な人が民謡を口ずさむのを耳にすることもあれば、祭りに参加し、歌い踊る機会もあるだろう。そうした日常の中で音楽を感じる経験の積み重ねが、一人ひとりの人間の中で、汲みつくせないほどの音楽の泉を形作る原動力となる。その泉は、師事した先生方の教えと渾然一体となって、演奏家として自立して行くための確かな拠りどころとなる。祭りだけではない。レストランへ行けば楽団の奏でるチャールダーシュが聞こえてくる。これは語義的には居酒屋風の音楽だが、緩急織り交ぜた民謡風の音楽である。ピアノに向かえば、チャールダーシュはブラームスやリストの曲にも顔を出す。チャイコフスキーにそのリズムを感じることもある。ハンガリーでの生活することは、それ自体が、知らず知らずのうちに、五感のすべてを通してクラシック音楽を実感することなのだ。

もう一つは、三勇士君の「やる気」を正面から受け止め支えてくれた周囲の温かい支援の輪の存在である。音楽家の祖父母に見守られたという恵まれた環境にあったとはいえ、年端も行かぬ6歳の少年が、親元を離れて異国で生活しつつ学ぶ厳しさは本人にしか分からない。幼い音楽家が身をおくのは、高い到達レベルを要求される厳しい競争の世界である。与えられた環境のメリットを最大限に生かし、自らの糧とできるかの鍵は、才能はもちろん、強い意志と不断の努力にある。三勇士君は「両親や兄弟は他人のよう」と語ったことがある。とにかく異国で独り立ちしなければならないという強い意志は、数々の逆境をはねのけ、いくつものハードルを越えて、鋼鉄のように鍛えられていった。そして、言葉の壁をクリアし、何事にも真摯な態度で取り組むうちに、周囲をいつの間にか味方につけてしまったに

違いない。三勇士君の真っ直ぐな姿勢を見ても、手を差し伸べざるをえなくなるのだ。

三勇士君のバルトクを聞いて考えをめぐらすうち、筆者は、ここに記した2点が彼の才能を伸ばす基礎となり、ハンガリーでの成功につながったのではないかと考えるようになった。とくに、ハンガリー生活の中で体験し、自らの感性の中に知らず知らずのうちに刷り込まれたハンガリーのリズムは、日本で育ったピアニストには獲得しがたいものだ。彼の演奏からはハンガリーの息遣いが感じられるのだ。

2008年6月、東京でのリサイタルは満席で、同じ学校に在籍していると思われる多数の女子学生の姿も目立ったが、よく見ると年齢層はかなり分散していた。彼が既に東京でも確実にファンを得つつあることがわかった。プログラムの前半はフォーレ、ドビュッシー、シューマンと、無難だが内容的にはバラエティに富んだ組み合わせ。後半はお得意のバルトク、ウェーネル、コダーイ、リストと全てハンガリーの作曲家が並んだ。彼の音楽に対する真摯な姿勢は、最初の一音から聴衆をつかんでしまう。筆者は同年代の演奏家を折に触れて聴く機会はあるが、比べてみるにやはり、惹かれるものを感じたのは後半のプログラムである。そして、筆者のように人生の一時をハンガリーで過ごした者にとって、彼のバルトクやコダーイは、ハンガリーの空気がそのまま流れ出るような感覚に陥らせる。彼の演奏には日本で育ったピアニストにはない何かを感じられる(このコンサートの様子はインターネットを参照されたい。<http://kawai-kmf.com/concert-info/2008/06.04/report/>)。

演奏家としての金子君の歩みはまだ始まったばかり。可能性は無限。今後の展開は、ひとえに彼の誠実な努力と、ハンガリーで培った一生汲んでも汲みつくせないほどの音楽の泉を、どこまで自分のものとできるかにかかっている。他の誰のものでもなく、自分しか表現できない音楽の世界をどこまでも追求してくれることを、陰ながら応援している。ハンガリーに在住されている皆さんも、ぜひ機会を得て、三勇士君の音楽の世界に触れて頂きたい。

ハンガリー語著書出版に寄せて

盛田 常夫

著作発表の経緯

Változás és örökség—Ferdeszemmel Magyarországról(『変化と継続—やぶにらみのハンガリー社会論』)と題する著書を発表した。体制転換による社会変化と、表面的な変化にもかかわらず社会の根底に流れ続ける前体制の社会的行動様式を分析したものである。副題は、「灯台下暗しのハンガリー人が気づかない視点から社会を分析する」というユーモアと皮肉を込めたタイトルである。

2006年末に週刊誌Élet és Irodalomに掲載されたA kincstári kapitalizmus(国庫資本主義論)が反響を呼んだので、2007年2月にその続編Rendszerváltás értelmezéséről és „vendégmunka” jelenségről(体制転換の理解と「ゲストワーカー現象」)を、さらに5月にはPragmatizmus és populizmus(プラグマティズムとポピュリズム)を同誌に発表した。双方とも現在のハンガリーの政治状況の批判的な分析にもとづき、ハンガリー資本主義の特異性を論じたものだ。翌2008年3月には当時の健康保険改革構想を批判したNem minden változtatás reform(すべての変革は改革にあらず)が同じくÉlet és Irodalomに掲載されたが、この論文はSZDSZが推進する健康保険民営化を厳しく批判する内容だったため、国民投票で政府案が否決されまで掲載が数ヶ月も見送られた。しかも、原文に含まれていた同誌の常連論客で元SZDSZ国会議員パウエル・タマーシュを批判した部分は、編集部の権限で削除された。以後、同誌編集部との意見の違いが明確になり、Élet és Irodalom誌との関係が冷え込んだ。

現在のハンガリーのメディアは雑誌・新聞だけでなく、テレビやラジオも政治的な党派色が鮮明である。友人たちを自宅に招く時も、それぞれの支持政党を知らないと思わずい雰囲気になるから、客人の組合せに気を遣う。困ったものだ。

さて、昨年春以降、何本かのハンガリー社会論を認めたが、どこにも発表しないので貯めておいた。手許においておくのはもったいないから、自著として出版しようと思立ち、昨年夏から全体構想を練ってきた。「体制転換の哲学」を新たに書き下ろして巻頭論文にし、これまで発表した論文や手許にある

論文を体系的に並べて第一部とした。

第二部として、『異星人伝説』と『コルナイ自伝』の訳者後書きを据えた。ただ、この2編だけではパンチ力に欠けるので、昨秋、横浜国立大学で発表した学会報告「コルナイ経済学をどう評価するか」を付け加えて、第二部「書籍の世界」(könyvvilág)とした。

第三部としてハンガリーに関係する映画評論を据えた。最初が「ビューティフル・マインド」で、これはノイマンとナッシュの業績を比較したもの。この最初の原稿は当地のfizikai szemle(物理評論)の2002年6月号に発表され、日本語版が「経済セミナー」(2002年7月号)に掲載された。さらに、アメリカの健康保険システムを扱ったSickoを題材にしてハンガリーの議論を批判した評論、さらにサボー・イシュトヴァーン監督になるTaking Sideへの評論を加えた。この最後のものは、フルトベングラーのナチへの協力をテーマにしたものだが、ハンガリーの秘密警察と政治家の関係を暗に批判した評論である。この3編で第三部「映画の世界」(filmvilág)を構成した。

こうして、全体で3編14章構成の論文集が出来上がったが、出版社サイドが第1部をさらに理論編と社会評論の二つに分ける提案したのでこれを受け容れ、最終的に4編14章構成になった。

ハンガリーの友人たち

私のハンガリー語は30歳過ぎてから学んだ語学だから、絶対的な限界がある。言語習得で書き言葉はもっとも難しい。母語であつても誰もが知的な文章を書けるわけではない。母語としない外国人が読ませる文章を書くのは不可能である。だから、書き言葉は最終的に母語とする専門家の手による校正がなければ、文章として完成しない。

私はハンガリー語で書き始めるが、そのハンガリー語文をまず身近な人に見てもらって、とにかく意味が通じるハンガリー語文を完成させる。これを知人・友人に送って感想を聞いたり、文章表現の修正意見を求めたりして、最終稿を仕上げる。もちろん、雑誌や書籍に掲載する場合には、さらに編集部による表現の最終的なチェックや校正者の手が入る。

これまで私の日本語書籍出版でいつも表紙デザインや挿絵を寄せてくれた画家がい

る。著名なグラフィック画家のカシュ・ヤーノシュである。コルナイの日本語翻訳書には彼のグラフィックを使用した。今回もカシュに論文集の原稿を渡し、表紙デザインの構想を依頼したが、癌を患っていて新たなものを構想するエネルギーがなくなっていた。そこで、以前に日本語出版で使ったグラフィック画から私がテーマに合いそうなもの一つを選び、それをベースに新たに仕上げてもらったものが、今回の書物の表紙デザインである。

コルナイには書籍の推薦文を依頼した。もちろん、事前に原稿を送った。昨年末、コルナイが訪日する前に、彼の自宅で夕食をとりながら、私のコルナイ経済学論にたいする異論が私に伝えられた。どうして譲れないと主張する一つの論点以外は、私の批判的な考察の大部分を受け容れた感触を得た。この出版記念会1週間前には、今度は私の家で日本の土産話を聞きながら昼食をとったが、その時に原稿の印刷校正版を手渡した。この材料がないと、出版記念会の挨拶は引き受けられないという。この程度のことで、著作にしっかりと目を通してから、自分の意見を表明したいというのがコルナイの姿勢である。コルナイの実直さが現れている。

そして、私の著作を書物の形にするのを最初から最後まで支援してくれた友人がいる。写真家のセレーニイ・カーロイである。美術出版社を経営する彼は自費出版で本を制作できるが、書籍販売の流通システムに入っていないので、一般書店へ流すことができない。それではもったいないからと、知り合いの出版社を片っ端から当たってくれ、最終的に学術・美術書を出版しているBalassi kiadóに出版社が決まった。

書名は私が決めた。Ferdeszemmelという副題はザライが提案した。「斜に構えて見る」という皮肉を込めた意味になるが、「やぶにらみ」というユーモラスなニュアンスもある。

出版記念会

最終稿は昨年末に出来上がっていたが、出版社の編集部が一月半ほど留まっていたために、書籍の完成が3月末にずれ込むことになった。この著作をどのように宣伝しようか思案していたようだ。漸く2月半ばになって、この4月のブダペスト国際書籍フェアに、同様のテーマをもった別の2冊の著作とともに、「ハンガリーの過去、現在、未来」という

テーマでBalassi kiadóのブースを作り、書籍出版記念会を開くという方針が決まった。

私の方は、これまで世話になった人々や友人・知人を集めた個人的な出版記念会を開くことを決め、3月6日に日にちを決めた。多忙な人々のスケジュールを調整した結果、書物の完成を待つことなく出版記念会を開くことになった。しかし、現物がなければ形が付かないからと、セレーニイは印刷用の体裁を整えた初稿を知り合いの印刷所で10部だけコピーし、それを簡易製本して出版記念会にもってきてくれた。

『異星人伝説』の日本語出版時には、科学アカデミーで物理学者を中心とした多くの科学者を集めて記念会を開き、その後、レセプションを開いた。音楽を入れて楽しい行事にした。今回もセレーニイ、カシュ、コヴァチ、ザライ、コルナイの主要な友人たちの辞をもらうだけでなく、その前後に音楽を入れて、エレガントな文化行事にすることに努めた。『異星人伝説』の出版記念会と同様に、

会の司会は友人のチュルガイ・アルパード教授(パズマーニイ大学、ノートルダム大学教授)にお願いした。チュルガイ教授はインテルのグローヴと同学年で、人工網膜チップ開発で知られているロシュカ教授や前科学アカデミー総裁グラッツとは竹馬の友である。体制転換期に彼が科学アカデミー本部で事務局長をしていた時に知り合い、今は私の会社の事業パートナーである。

出版会には実に多彩な友人や知人が集まってくれた。アカデミーの経済研究所のファゼカシュ所長ほかの研究員、旧経済大学(現コルヴィヌス大学)からはザライ元副学長と大学院議長のメメシ、コピントータルキ研究所のオブラートなどの経済学者、政治学者のケーリ・ラースロー、アカデミー材料研究所所長のバルジョニイ、パズマーニイ・ピーテル大学の教学部長のソルガイなどの研究者。音楽の分野からは演奏を引き受けてくれた国立フィルのバルタ・ジョルト夫妻、国立フィル代表のコヴァチ・ゲーザ、MAV

オーケストラ代表のレンドヴァイが駆けつけてくれた。鍋倉大使初め、日本に関係しているハンガリーの友人たちや、当地に長期に滞在されている日本の知人・友人たちにも来ていただいた。出張や休暇で参加できない友人たちもいた。OTP銀行副頭取ウルバンは国外出張、コルヴィヌス大学学長メサローシュはスキー休暇で欠席だった。友人のプロスポーツ選手も呼ぼうと思ったが、今回は声をかけなかった。

記念会の後、糸見さんのご主人で映画監督のコーシャ・フェレンツさんからは、「このような会を開いてもらって有り難かった。今のハンガリーでは政治的党派を超えて、知識人や文化人が一堂に会することができなくなっている。今日の参加者のような多様な知識人の集まりは、君だから開けた。この会で私が発言する機会が得られたなら、<今度は何時このような会を開くのか>、と質問しようと思っていた」という言葉をいただいた。

出版記念会参加者への謝辞

大使閣下、ならびに友人諸兄！

本日は私の出版記念会にご参集いただき、ありがとうございます。なによりもまず、本書の制作において、その最初のアイデアから最終的な完成に至るまで助力を惜しまなかったセレーニイ・カーロイに感謝します。次に、グラフィック画を寄せてくれたカシュ・ヤーノシュに感謝しなければなりません。これまで私が日本語に翻訳出版したハンガリー語書籍は、常にカシュのグラフィック画で飾られています。友人のコヴァチ・ゲーザとザライ・エルヌーには最初の草稿の目通しから文章の修正に至るまで、たいへんお世話になりました。そして、コルナイ・ヤーノシュは私にとって特別の地位にあります。私の学生生活のなかで彼の著作の研究に最大の時間を費やしましたし、実にいろいろな面で最大限の教えを得ることができました。これまで翻訳でしかコルナイ経済学へ貢献できませんでした。今回は漸く自らの著作によって、コルナイ経済学への理解に貢献することができたのではないかと思います。もちろん、コルナイ教授は本書で私が展開しているすべてのことを、受け容れることができないことは承知しています。

本書はたんなる社会批判を超えて、さまざまな内容をもつ書き物から構成されています。とはいえ、皆さんが知っての通り、私の著作は常に批判的な精神で満ちあふれています。これに関連して、少しばかりお話ししたいことがあります。

ある国際会議でハンガリーの状況を批判的に分析したものを報告した時のことです。日本人討論者の1人が、次のような言葉でコメントを始めました。「報告者はハンガリーで嫌な経験をしているのではないか。だから、このような批判的な目でハンガリーを分析するのではないだろうか」と。研究者は研究対象国の宣伝マンでも最良でもありません。しかし、自分の研究対象は非常に重要で、その対象国で行われていることを正確に紹介し、後押しすることが自分の仕事だと考える人も少なくないのです。このような話を知人の教授に話したところ、「それは飼い猫と同じです」という答えが返ってきました。「自分の飼い猫は、世界で一番賢くて、一番チャーミングだ」と

思うのと同じだということです。それぞれの研究対象国がポーランド猫、チェコ猫、ハンガリー猫になるという訳です。それ以後、私はこのような研究者の態度を、「飼い猫現象」と呼んでいます。

私にとって、ハンガリーは飼い猫ではありません。切実な関心がなければ、わたしにとってハンガリーの行く末など関心ありません。私にとってハンガリー社会は実生活の一部であり、ハンガリーがどのように発展し、どのように変化していくのかは他人事ではないのです。

これに関連してもう一つお話ししたいことがあります。先週、出版社の編集長からこんな質問を受けました。「ハンガリーの生活でとても耐えられない出来事に何度も遭遇していながら、それでもハンガリーに留まり続けている理由は何か」と。これはまた先の問題とは性格が異なる質問ですが、本日の記念会の出席者がこの質問に答えていると思います。この会には実に多様でそれぞれの分野で一流の方々が参加しています。学者・研究者のほかに、写真家、グラフィック画家、音楽家、それから映画監督までいらっしゃいます。日本で私が出版記念会を開いても、このような各分野の優れた人々を一堂に集めることは不可能なことです。ハンガリーは国が小さく、社会も小さいが、だからこそ、優れた人々と非常に密な友人関係を築くことができます。

最後にもう一つだけお話ししたいことがあります。10年ほど前、日本の雑誌が年金生活者の海外移住都市ランキングを発表しました。何とそのランキングでブダペストが1位にランクされました。その理由は分かりません。当時、故ジョン・レノンの妻であるオノ・ヨーコさんがハンガリー人のボーイフレンドと一緒に、度々、ブダペストを訪問されていたことが影響したと推測しますが、私がお話ししたかったのはそのようなエピソードではなく、その記事に飾られていたブダペストの街の魅力を表現する「キャッチフレーズ」です。「人生の芸術家になる」。これがブダペストのキャッチフレーズでした。

これこそ、私の人生目標でもあります。そう、ブダペストで人生の芸術家になる。

本日は、ご参集、ありがとうございました。

コチシュ・ゾルターンとの出会い

サーライ東口美登里

その青年はとても長い指の爪をかんでいた。1974年夏ブダペスト、バルトークセミナーでカドシャ・パール教授がアメリカ人の女性にバルトークのピアノ曲を指導していた教室でのことだった。その青年は助手の通訳と並んで座っていたのに、何をするでもなくときおり爪をかんでいた。鼻がそっていてあどけない顔からするとまだ学生のようなだ。あまり上手とも思えなかったアメリカ人女性のレッスンが終わるとカドシャ教授はちよつとため息をついてから、「バルトークのピアノ曲はそもそも…」という講義を10分ほどしてそのセミナーは終わった。40人位いた教室で立ち上がったとき、その青年が正面にやってきて英語で話しかけてきた。

「あなたも音楽家？」

「いいえ」

「じゃあ何をしているの？」

「児童心理学専攻の学生よ」

「名前は？」

「いつまでいるの？」

と質問攻めで、「明日も来て。旧リスト音楽院の住所はこれ。同じ時間に」と紙を渡され、再会を約束してしまった。青年の頬が大きく笑ってくずれた。灰色のまっすぐなまなざしとともに、子供のままに育った人だと思った。

次の日、腕に無用な負荷をかけてはいけないピアニストのはずなのに、重そうなケースを手を下げて立って待っていた。ここでもまた矢継ぎ早に次から次へといっぱい質問されたが、答えきれずに後は手紙でということになった。これがコチシュ・ゾルターンという音楽家との出会いである。私とハンガリーのつながりは、コチシュとの出会いから、こんなふうが始まった。

そんなに長くない文面だが、でも筆まめな文通が1年ほど続いた。そして、翌75年にコチシュがピアニストとして初めて日本へやってきた。大学院に通っていた私は自由な時間があつたので、「遠くより友きたる、それもまた楽しからずや」と、家族一同もてなした。残念なことに、関西のリサイタルのときは聴衆が少なかった。まだ無名だったし、何とベートーヴェン交響曲5番をピアノで弾いたので、ピアノの学生には勉強にならないプログラムだったのかもしれない。ピアノコンサートなどに行ったことのない親戚や知り合いを招待したので、私が振袖姿で花束を渡すために舞台上に登場した時に拍手が一番大きくなって、困ってしまった。

このコンサートを終えてから、今度は東京でレコーディングを行った。帝国ホテルが宿だったので、音響がいいという理由でわざわざ遠い荒川区民会館まで、2日間の録音に出かけた。それがバルトークのピアノ曲ミクロコスモス全曲のレコード録音だった。コチシュの弾くバルトークのきらめく音に、飽きることなく、たった1人の客席で

物音を立てないように終日浸っていた。同じ曲を5度ずつ録音し、曲ごとにミキサー室に入って、「ここまではテイク1、ここからはテイク3、またテイク1にもどって終わる」と、手早くコチシュが決めていた。ほとんど間違いがないので、後になればなるほど録音がはかどった。1度目のテイクを選ぶことが多く、そんなものかと思った。たまた間違えると、ハンガリー語で何かつぶやくのですぐにわかったが、何と言ったのかたずねると、はにかんで答えなかったのを覚えている。

76年8月に漸くレコードが出来上がり、私はこれをレコード会社から預かって冬のオーストラリアへ向かった。その時、コチシュは3ヶ月間のオーストラリア演奏旅行中で、私はメルボルンで開催された心理学学会に出席するのを機会に彼と合流した。学会出席をはさんで2週間ほど、メルボルン、ホバート、シドニーと真冬の演奏旅行に同行した。コチシュはチャイコフスキーのピアノ協奏曲を、ものすごい速さと迫力で弾いていた。文化や習慣が違うオーストラリア滞在が長過ぎて気の毒だったが、私が一緒にいたことを、とても喜んでくれたようだった。

続く77年にコチシュが再び日本へ演奏旅行に来たときにも、私はまだ大学院に在籍していて時間が自由にとれたので、彼の日本滞在に付き合うことができた。この頃には日本のクラシックファンの間でもコチシュの名前が知られるようになり、ピアノリサイタルの聴衆はどこでも飛躍的に増えていた。N響との協演も実現した。

そして78年夏、今度は私がハンガリーを訪問して、一夏滞在した。その夏の終わりにブダペストからロンドンへの演奏旅行に同行して日本へ戻ったが、ブダペストでもロンドンでもラーンキ・デジューやシフ・アドラーシュなどのハンガリーを代表する若手ピアニストたちが集まり、楽しくにぎやかな時間を過ごした。

こうした付き合いが続き、私の中で一つの踏ん切りがついた。そして、ELTE (Eötvös Lóránd Tudományos Egyetem) の発達心理学の客員研修員の籍を得て、とうとう79年1月にハンガリーに渡った。すぐにブダペストのコチシュ家に引っ越して、30年にわたる私の長い長いハンガリー生活が始まった。

それから紆余曲折があり、結局、コチシュとは結婚することにはならなかった。それでも、お互いに別の伴侶を見つけた後は、家族付き合いが始まり、息の長い友人付き合いに変わった。互いの子供たちも仲良くしているので、家族ぐるみで会うことが多いし、彼の演奏会を欠かしたことがない。

今ではコチシュもピアノ演奏より作曲や指揮の仕事をするが多くなったが、もっぱら彼の演奏だけを聴いてももう35年になる。私の耳もいい音楽、レベルの高い演奏しか受け付けなくなってしまっている。幸せというべきなのだろう。



笑顔と干菓子と、雪の花

フルディ満名実

干菓子。そう、彼女の雰囲気を表すにぴったりな、日本を代表するお菓子があります。見た目にもかわいらしく控えめな色使いの干菓子を、左手で受けながら、くずれないようにそうつつまんて舌の上ののせる。すると品のよい甘味が口の中いっぱいに拡がって、気がつけば遠く懐かしい昔を彷彿とさせ心震わせるそれは、小さく可憐でありながらもしっかりと自分を主張しています。クリスマスはまさにそんなお砂糖菓子のような女の子、それが私の第一印象でした。

2007年4月、初めて小5-6年生の複式クラスを担当することになった私は、彼女と出会いました。いつもうつむき加減でひっそりと座っている彼女でしたが、授業での真剣なまなざしには大変心を打たれておりました。あまり自分を出そうとせず、ふうわりとした容貌でもきらきら輝く瞳を私に向けてくれる彼女を、私は本当に日本のことが好きなんだなあ、ほほえましい想いで見つめておりました。休み時間になってもクラスメートたちとおしゃべりに夢中になることも少なく授業の予習をしているような、ひたむきにがんばっている少女、いつしか私は、彼女をげらげら笑わせてみたいと、少年のような思いを抱きました。

クリスマスの、ほんなりした微笑に出会うことのできた日には、一日中なんだか心がほんわかあつたくなりました。気がつけば落ち葉のじゅうたん。あつという間に冬が来て、複式クラス初めての学習発表会がやってきたのです。日本文壇を代表する紫式部、松尾芭蕉そして宮沢賢治に関する資料を共同制作して発表し、傍らでは歴史的背景を踏まえての寸劇にもチャレンジする、という盛りだくさんの内容で展開しました。宮沢賢治も、寸劇を作って生徒たちに演じてもらい楽しんだ、とのエピソードが残っていますが、この寸劇でクリスマスは、宮沢賢治に扮してくれました。

本番間近となりいよいよ立ち稽古を迎えたある日のこと、松尾芭蕉役の男子児童にクレームが入りました。「もっとおじいさんっぽく、もっと表情豊かにせりふをしゃべつたら？」

最上級生のある生徒の一言に彼は奮起し、ユニークで愛嬌たっぷりの芭蕉へと、みるみるうちに変身していったのです。私をはじめ、クラス中が笑いの渦。すると、彼の横で宮沢賢治になりきっていたクリスが、もの静かで「クスリ・！」としか笑わなかった彼女が、顔を真っ赤

孫の過酷な運命

スクカーレーク・イリン

伊達クリスチアンネは、2002年3月に祖父母のいるスロバキアのコマーロム市へ引っ越して来ました。クリスマスは8年間、日本の北九州市で生活していましたが、日本人の父親が死去したので、それまで10年間幸福な結婚生活を日本で送っていた母とともにスロバキアへ帰国しました。クリスマスは、小学1年生を日本で修了していましたが、ハンガリー語はまったく話せませんでした。

私のところへ戻ってくると、すぐにクリスマスはハンガリー語とスロバキア語を学び始めました。クリスマスの母語はハンガリー語ですが、スロバキアでは少数民族の学校でもハンガリー語以外に国の公用語であるスロバキア語を学び、英語も必須教科でした。

折尾市で誕生したクリスマスは日本国籍を保有していますが、同時にスロバキア国籍も持っています。日本語を忘れないようにと、クリスマスは、たくさん読書や作文をしたりしました。また、週1回、首都ブラチスラバにあるコメンスキー大学の先生に習ったりしていました。

クリスマスは、2003年と2004年の夏に、日本人補習校の5週間に及ぶ夏期講習に参加しました。講師の先生方がとても優しくて親切だったので、クリスマスは、この夏期講習がとても気に入りました。夏期講

にして腹を抱え、涙を流さんばかりに足までばたつかせながら全身で笑っていたのです！

「ああ、よかった・！」

あのときの姿は今でも鮮やかに心に刻まれています。なぜ「よかった」なのか、よくわかりません。いつも彼女を笑わせることが大好きだった私にとって、至福のひとつでもあり、最高の思い出となったのでした。

それまで、彼女の過去はほとんど知りませんでした。2008年も引き続き複式クラスを担当するようになって始めた、クラスの生徒と私との秘密の交換日記に書かれた彼女の言葉を読むまでは。チョコレート香りつきのノートの、その紙面上に淡々と語られていた彼女の言葉に、私はその簡潔さと裏腹に秘められたクリスマスの悲しみの深さを読み取ってしまいました。一女の母である私ですが、私の娘と彼女がシンクロしてしまった

瞬間だったのかもしれない。震えが止められず、抱きしめてあげたい思いでいっぱいになっていました。その年の初夏の頃、宿題に出した彼女の日記から、お母様までもが天に召されたのではないかとわかり、切なすぎて涙が止まりませんでした。

翌週、彼女はいつもと変わらない様子で補習校にやってきました。私は日記の内容を問いかけることもできぬまま、文法や漢字の間違いを添削したその作文用紙を彼女に返し、相変わらず彼女を囲んでクラスメートたちとおしゃべりに花を咲かせ、クリスマスを笑わせる機会があらばと、様子を伺っておりました。こうして夏休みが過ぎ、やがて真実を、クリスマスの祖母さんのお口から聞かされることになりました。

今回いただいたクリスマスの祖母からの手記ですが、干菓子のような彼女の身の上起こった過去の、その時間の重圧に押しつぶされてしまいそうな気持ちでいっぱいになりました。クリスマスはいつもと変わらず、むしろそれまで以上に日本語に前向きに取り組むようになっていきます。長い冬の明けるときを知らせる、雪の花にも似た凛凛とした強さをも感じさせるような、相変わらずきらきらとした眼差しを私に向けながら。

彼女が楽しみにしている宿泊学習を終えて新学期が始まると、クリスマスは中学1年生に進級することになっています。私はいつまでも彼女の笑顔を見守りながら時を過ごしていくつもりです。あの、顔を真っ赤にしながらいっぱい流していた彼女の涙を、大切に、両手のひらにそおつとひろいあつめながら……。

習では、国語学習だけでなく別の教科も学習しました。また、物理の興味深い実験も行われましたし、2日間の遠足も企画されました。

残念ながら、補習校がなくなりましたが、毎週土曜日に授業を行うみどりの丘日本語補習校が創設されました。私共は百キロほど離れた場所に住んでいるため、補習校へ通うのはかなり疲れます。しかし、クリスマスは、補習校の友人や先生が大好きなので、決して休もうとはしません。補習校の宿題をやるために多くの時間を費やしますが、これはクリスマス勉強の手伝いを誰も家で出来ないからです。昨年、長い闘病生活の末、クリスマスの母親も逝去しました。

現在、クリスマスは、補習校で小学6年生を終えようとしており、学業を続けたい意志を持っています。土曜日だけという限られた時間ではありますが、補習校ではクリスマスや終業式に楽しい企画が催され、いつも陽気で楽しい雰囲気一杯です。補習校児童一同は、ブダペスト日本人学校のドナウ祭も見学しました。そこで、クリスマスは、自分が日本の幼稚園と小学1年生時代に過ごした日々と学芸会を懐かしく思い出したようです。

クリスマスと補習校の児童達は、近々ノルマファで行われる2日間の宿泊学習に行くのを楽しみにしています。

リスト音楽院ピアノ科
浅井 高平さん

ハンガリーに来てから約1年半。自分の中で時間が過ぎるのが、ゆっくりだった1年目に比べ、2年目は、あっという間に過ぎていくような気がします。ブダペストは、ようやく長い冬を終え日が



差し気温が暖かくなったせいか、多くの人々が街に繰り出してきています。雪で、お化粧された冬のブダペストも素敵ですが、私はブダペストの春が好きです。春の音楽祭では有名な演奏家も訪れ、日本では絶対に聴けないくらいコンサートにも足を運んで素晴らしい演奏を聴く事ができますし、市場では野菜の種類も多くなってきます。冬は曇り空の日が多かったので、何より心地よい風と共に街を歩くのが、なんとも気持ちがいいのです。

皆さんご存じのゲッセルルトの丘は、ハプスブルグ家がハンガリーの独立運動を鎮圧した後に監視した場所でもあり、第2次世界大戦ではナチスドイツに、ここから砲弾を受けと言う暗い過去がある場所ですが、今では、パノラマポイントとして、多くの観光客たちが押し寄せてくる所です。冬は寒くて時間もかかるので行きませんが、春や夏に行くと、強めの風が吹く中、要塞まで上ると眺望は絶景で、ここに来る度に僕は、この街が好きなんだなぁと改めて実感しています。

留学生活には、だいぶ慣れた気がします。こちらに来て初めての料理も少しは手際が良くなり、一人暮らしも板につきました。学生ビザを取得する時の、たくさんの書類を集めたり申請なども、焦らずこなせるようになりました。水着か、ふんどしで入る温泉にも違和感もなくなり楽しんでます。独特な曲調のバルトークやコダーイの音楽も、なんだか前より耳になじみ自然に聴けるようになったような気がします。音楽院でのピアノのレッスンは、とても楽しいです。レッスンに持っていくまでの経過は、先生のアドバイスをこなす事が出来ない時も多く落ち込む事も多いですが、曲が仕上がってくると共に、今まで僕の中に無かった新しい世界が広がり、演奏形態もバリエーションが増えて行く事を実感できています。それから、ここで出会った友人達は、皆さん、いろいろな面でお互いに助け合える方々ばかりで不安になる事もなく、とても有難いです。

語学は、、、がんばります。

デブレツェン大学ハンガリー語学科
景山 靖子さん

ハンガリー東部、第2の都市としても知られている学園都市、デブレツェン。そして隣国ルーマニアの国境からはわずか30キロほどの所に位置しています。デブレツェンは第2の都市といっても、ブダペストの雰囲気とはまた違って、ゆったりとした街です。中心街は道が大きく開けていて、美しい大きな黄色い教会やテラス席のあるレストランにカフェ、噴水やベンチが並んでいて、落ち着いた雰囲気を醸し出しています。さらに自然がとても豊かで、デブレツェン大学のすぐ側に大きな自然公園があり人々の憩いの場でもあります。そして夜空を見上げればため息をつくほど星が美しい街です。

私は2008年9月からおよそ1年間、ハンガリー語を学ぶためにここデブレツェンで暮らしています。そして現在デブレツェン大学にて、外国人のためのハンガリー語講座、そしてハンガリーの学生と一緒にハンガリー語専攻の授業を受けて勉強しています。日本を離れて、母国語以外でコミュニケーションをするのはなかなか大変ですが、私がここで何よりも楽しい!嬉しい!と感じることは沢山の人たちとの出会いです。ここデブレツェン大学は国際色が豊かで、世界各国から留学生が学びに来ています。例えば私のハンガリー語講座のクラスでは韓国、スロヴァキア、アメリカ、フィンランドからの学生がいます。

また私は大学の寮で暮らしているのですが、その寮にも多くの留学生が暮らしています。もちろんハンガリーの学生も暮らしていて、毎日が異文化との触れ合い・驚きと感動に満ち溢れています。もちろん日本の文化との大きな違いに戸惑うことや、不安になることもあります。たくさん経験していくうちに日本を出発する前より視野がぐっと広がった気がします。そんな環境の中で仲良くなった留学生やハンガリー人の友達との交流は私にとってとてもかけがえのないものになりました。お互いの国の料理を作り合ったり、旅行へ出かけたり、実家へおじゃましてハンガリーの家庭を直接体験したり・・・そうしていく中で、今まで知らなかった異国の文化をリアルタイムで知ると同時に自分の国についても改めて見つめ直すことができるようになりました。残り少ないハンガリーでの留学生生活を、思う存分楽しもうと思っています。

ELTE大学人文学部ハンガリー語学科
藤川 摩耶さん

私は昨年九月よりブダペストのELTE大学人文学部のハンガリー語学科に留学しています。日本でもハンガリー語を専攻しており、ハンガリーにはハンガリー語の習得とハンガリー語を生かした将来の可能性を模索する



ためにやって来ました。ELTE大学では、週に二回か三回の語学の授業を基本として、希望制の会話の授業やハンガリーについての授業があります。また後期からは他学部の授業を取ることも可能になり、今は日本語専攻の翻訳の授業にも出席しています。大学の授業は非常に少ない為、余った時間を持って余してしまうこともあります。留学当初は、日本で経験したことのないほど沢山の自由時間、親元を離れての一人暮らし、生活習慣も考え方も違うハンガリー人たちと交流に戸惑い、くよくよ悩むことも多々ありましたが、今は時間がいくらあっても足りないほど充実した日々を送っています。私の留学生活でのなによりもの宝物は人との出会いです。できるだけ積極的に外に出るようにすることで本当にたくさんの人に出会うことができました。日本に興味を持ってきているハンガリー人との会話で外側から日本を見つめなおすこと。

様々な国からやってきている留学生たちと留学の悩みを語りあいお互いに慰め、励まし合うこと。日本にいては出会うことがなかったであろう、ハンガリーで学び、働く日本人たちと出会い、話を聞くこと。

すべて日本では決して経験しえなかったことで、とても刺激的で毎日驚きと新しい発見の繰り返しです。人々と交流することで自分の将来の方向性もほんの少しずつですが見えてきました。そして、なによりも、これらの出会いを通して得た、国籍を超えた腹を割って話すことのできる友人たちの存在は私の生涯の財産となるでしょう。早いもので留学ももう半年を切ってしまいました。まだまだやり残したことの多さ、ハンガリー語の伸び悩みに焦燥感を感じることもありますが、残された日々を精一杯生き、学び、より多くの人に出会い、帰る頃には笑顔でやりきったといえるようにこれからも精進していきたいと思っています。

リスト音楽院ピアノ科
中村 美貴さん

私は、日本の大学院に在学する傍ら、昨年9月からこちらに留学しています。そして、この3月に日本の大学院を修了しました。初めてここハンガリーの地に足を踏み入れたのは、昨年4月のこと。日本での先生が以前ここに留学されていて、先生の音楽の全てはそこで変わったという言葉を引き継ぎ、その時からハンガリーの地で私も学んでみたいと思い始めました。まずは良い経験になればとリスト音楽院の先生にレッスンをさせて頂いたのですが、初めてレッスンをこの身で体験したときのことは、今でも全てが鮮明に残っています。演奏に際して、フレーズを繋げるための細かな指番号、内声のニュアンス、曲の奥深い背景、そして何よりも、先生の指、体から奏でるオーケストラのようなダイナミクスにはただただ驚きでした。と同時に、自分にとって不足している部分が多すぎ、少しでもその隙間を埋めようとピアノに向かい始めたレッスンでもありました。ヨーロッパの中でも西欧とは違った街の空気を感じ、レッスンを終えて帰国した時には、ハンガリーで学びたいという思いが強くなっていました。

6月にこちらで入学試験を受け、9月から留学していますが、こちらに来てからの生活は、まずは必要な物がどこに売っているのか、その場所まではどうやって行くのか、今まで日本では当たり前だったことにありがた味を感じながらの毎日。先輩留学生や同じく9月から留学している友達、周りにいる多くの人に助けられて、少しずつ自分なりの生活を送っています。一方で日本の大学院を在学中であった私は、大学院を修了するための演奏プログラムにリストを予定していたため、ハンガリー人であるリストの作品をハンガリーで学べるのが更に良い機会でした。日本での修了試験は昨年12月だった為、3ヶ月弱、先生に細かくご指導頂きました。そして試験の前に、こちらで演奏会をすることを先生に勧めてもらい、試験のプログラムを学校の小ホールで全て演奏させて頂きました。この試験前の舞台での演奏は、自分の中でとても大きなステップとなりました。その後、日本に戻ってから試験を受け、無事大学院を修了することができました。現在は、ハンガリーに戻って更なる研鑽の毎日です。



こちらでのレッスンは、自分には更には何が必要なのかを考えたり、実際に感じる、とても有意義な時間になっています。驚いたのは、自分のレッスンの前に、ハンガリー人のレッスンを見ていると、弾いてレッスンするのは当たり前なのですが、先生とよく話している事。楽譜を指しながら、とにかくしゃべっています。日本での場合、先生の指導を聞いていることが多いですが、こちらでは、先生との意見の交換の場でもあるのだと、新たな発見がありました。そして、ブダペストでは毎日どこかで演奏会が行われています。日本では考えられないような値段で、更には学校にある大ホールの3階学生席は無料なので、一流の演奏をこの目で、耳で、頻りに直接感じることができます。気分転換に演奏会にでかけるといこともしばしばあります。こういった環境の中でハンガリー人の、人の暖かさを感じながら生活をし、刺激を受けながら音楽を学べることに感謝をし、今後の自分自身にとって大きな糧となるような経験をもっともっていきたいと思っています。

留学生自己紹介

ハンガリーバレエアカデミー 藪 香苗

<ハンガリー・ブダペストに来た動機>

高校の友人にハンガリーで幼少期を過ごした友達が居て、ハンガリーの話を知っているうちに一度は行ってみたい国となりました。

高校卒業後から2年間 スイス・ジュネーブに留学していました。ジュネーブの学校は Juenes ballet としても活動していて、1年間に舞台数はすごくおおく、大変貴重な経験ができたのですが、学校卒業資格などは一切ありませんでした。そして、ハンガリーバレエ学校に学士コースがあることを知り、まず、8月に2週間のサマーコースを受け、学校の雰囲気を知り、サマーコース中に行われている最終編入オーディションを受けました。

<ダンストレーニング>

ダンストレーニングは朝の8時に2時間のクラシックバレエの授業で始まり、その後の時間～12:30までは曜日によって違った科目です。例えば、10:00～11:00がバレエ作品レパートリー授業、11:00～12:30がモダンダンス授業、10:30～11:00はポワント授業、11:00～12:30はPas de deux授業。これは私の1年目＝つまり8年生の時間割です。最終学年の9年生になると、1学期は2月半ばに行われる卒業判定テスト合格に向けて、先生の個人的判断にもとづき時間割がくまれます。

2学期は、1時間30分のクラシックバレエの授業、そして卒業公演のリハーサルです。冬のくるみ割り人形の2週間公演や卒業公演2～3ヶ月前になってくると、18:00～20:00までのリハーサルも追加されます。ハンガリーバレエ学校のカリキュラムには社交ダンスの授業もあります。一年を通してやるのは難しいらしく、たいていは9月最初の2週間インテンシブクラスとなっています。週に2回英語が堪能な先生のもと、インターナショナル生用レパートリークラスが13:00～14:00に行われています。

<学科授業>

ハンガリーバレエアカデミーは3年間の学士号コース(bachelor course)をとることが可能です。このコースは毎年あるわけでもなく、人数が3人以上集まったときに設置されます。私の1年目も3人の生徒でスタートしました。バレエコースと学科コースは基本的に別のものと考えていて、バレエコースで違う学年の子(もしくはモダンコースの子)とも学科コースでは同じ1年生なのです。基本的には1年目・2年目ですべての単位をとり終え3年目は卒業エッセイに集中します。ただ、やはりハンガリー人の柔軟性が反映されているのか…。私はバレエコース8年生に編入し、卒業までに2年間しかなかったので、3年間のコースを2年間に短縮することを許可されています。2008年度から学士号コースに入った子が4人居たのですが、9月から1月の1学期の間で、1年分の授業をこなし単位を取得し、2年目の私たち3人は2008年度1学期中半分の学科がお休みになり、2008年度2学期新しい4人の子と一緒に2年目の授業をしています。そし

て、2009年7月に卒業予定です。

授業はもちろん英語です。先生も含めて、全員の英語レベルはそれぞれです。母国語の子もいれば、母国語のように流暢にしゃべる子もいて、私のように学校で習った程度のレベルの人も居ます。英語が母国語の人たちによる助けの元、授業が円満に進んでいるとっていいと思います。

私がこのコースにいて、一番大変だったことといえばもちろん言語です。やはり、日常会話ではあまり出てこない、硬い表現の単語が多々出てきたり、専門用語が出てきたり。そのうえ、ディスカッションをするクラスでは相手に納得してもらわなくてはならない話し方をしなくてははいけないし。最初の一年目は本当につらかったです。とにかく、友達と話したり、映画見たり、本を読んだり。それでも1年目は何も手ごたえを感じることはできなかったですね。2年目先生から「最近英語を聞くこと、しゃべることに自然に成ってきているように見えるわ。香苗が英語の会話をここまで楽しむなんて1年目は想像できなかった。これからがんばってね。」といわれたとき、努力が実り始めたんだなあ・・と感動してしまいました。まだまだ頑張らなくてははいけないのですがね。

授業は解剖学、音楽史・美術史・舞踊史・文化史(History of the culture)・映画史・Dance in home country(自分のダンス事情についての発表とディスカッション)。解剖学はオペラ座専任ドクターの下で、ダンサーの解剖学を学びました。ヨーロッパの歴史がベースとなっている音楽史・美術史は一番しんどいですね。時代背景を細かなところまで把握しなくて、授業についていけなかったりします。そして、先生によっては私が質問すると「あなたはヨーロッパ史を何も知らないのね。アジア人の怠慢ね。」と言われることも珍しくありません。それだけ、ハンガリーの先生は自分の教科について誇りを持っているのだと思います。日本は授業カリキュラムに沿って授業を進めますが、こちらの先生は熱中しすぎて授業カリキュラムからそれてしまうことがたまたあります。すごく興味深いです。

<今後>

最終的な目標は、自分の今までの経験を新しい世代の子に伝えることです。漠然とだけれども、いつかは日本でバレエを教えられたらいいな!と思っています。しかし、そのためにも、まずこの学校を卒業して、実際にダンサーとして働き、いろいろなことを吸収したいです。そしてバレエ教師としてちゃんと知識をつけ、資格を得て日本に帰りたいと思っています。まだまだ先は長いのですが、目標を見失わず最後まで遣り通して行きたいと思っています。



コンサート情報

桑名 一恵



《リスト音楽院留学生出演コンサート》

☆4月18日(日) 18:00 キシュチェリ博物館
友好記念年スプリングコンサート
指揮:セルメチ・ジュルジ
柏原 佳奈(ピアノ)
友好記念オーケストラ

☆5月11日(月) 19:00
ナードルテレム
永廣 まり(ピアノ)コンサート
曲目:ドホナーニ:4つの
ラプソディー
バルトーク:ピアノ協奏曲3番
その他
入場無料

☆5月24日(日) 16:00 ドナウ宮殿



日本・ハンガリー演奏家
ガラコンサート
吉川 亜矢子、永廣 まり、
香川 真澄 (ピアノ)
入場無料(入場券必要)

☆ 5月27日(水) 15:30 リスト音楽院大ホール
リスト音楽院卒業演奏会
井上奈央子(ヴァイオリン)
曲目:ベートーベン:
ヴァイオリン協奏曲
共演:リスト室内合奏団
入場料:500FT



☆6月16日(火) リスト音楽院小ホール
十川安里、菊地玲子ピアノコンサート
曲目:モーツァルト:ピアノソナタ 二短調 K311
ショパン:バラード第4番 その他

《お勧めコンサート》

☆6月20日(土) 19:00 聖ミハーイ教会
友好記念年バロックコンサート
篠崎 史紀(NHK交響楽団コンサートマスター)
セルメチ・ヤーノシュ
(ブダペスト祝祭管弦楽団コンサートマスター)
指揮:セルメチ・ジュルジ、友好記念オーケストラ
曲目:バッハ:2本のヴァイオリンの為の協奏曲
ヴィヴァルディー:2本のヴァイオリンの為の協奏曲

☆6月21日(日) 19:00 グデュール宮殿
篠崎 史紀(ヴァイオリン)室内楽コンサート
セルメチ・ヤーノシュ(ヴァイオリン)
グヤーシュ・マルタ(ピアノ)その他
曲目:シューマン:ピアノ5重奏
ブラームス:ピアノ5重奏

※ 印のついているコンサートは、情報変更があります。留学生コンサートは随時決定する為、詳しい最新情報は、こちらに掲載されています。WEB情報誌ブダペストネットワーク コンサート情報 <http://bpnet.web.fc2.com/koncert.htm>

《会場案内》

リスト音楽院 / Zeneakadémia
VI. Liszt Ferenc tér 8. Tel.: 342-0179

旧リスト音楽院 / Régi Zeneakadémia
VI. Vörösmarty u. 35. Tel.: 322-9804

ドナウ宮殿/DunaPalota
V. Zrínyi u.5

ナードルテレム/ Nádor Terem.
XIV. Ajtósi Dürer sor 39. Tel.: 344-7072

キシュツェリ博物館/ Kiscelli múzeum
III. Kiscelli utca 108. Tel.: 388-7817

聖ミハーイ教会/ Belvárosi Szent Mihály-templom
V. Váci u. 47/b Tel.:337-8116

《お知らせ》

日本・ハンガリー友好年を記念いたしまして、在住日本人留学生・音楽家及び両国に親交のある音楽家に声を掛けさせて頂き『友好年記念オーケストラ』が結成されました。スポンサー・後援・出張演奏依頼・年間会員など随時募集しております。是非サポートご協力お願いいたします。
お問い合わせ:Propart Hungary Bt(企画:桑名)
Tel: +36-1-7867846 / +3670-381548
e-mail: propart@chello.hu

運動サークル活動状況

飯尾 欽哉

長く陰鬱な冬が漸く終わり、運動各部の活動が活発になってきています。以下はその活動状況の一端です。運動部に入部希望の方、新たに部を作りたい方、ご意見やご質問等のある方、この季刊誌に原稿を寄せられる方は下記連絡先にご一報ください。

- ◎ 釣り部：新入部員を募集中です。
- ◎ バドミントン部（新設）：部員を募集中です。
- ◎ 卓球部（新設）：部員とお世話役を募集中です。

e-mail: daikichi@mail.datanet.hu (運動サークルまとめ役：飯尾欽哉、TEL: 225-3965)

2009年 ゴルフ部活動

ゴルフ部代表 町野 憲善

今年の冬季は例年になく降雪の日が多く、このままではウィンタータイヤとの決別は 3月末まで待たざるをえないかとの予想に反して、パンノニアゴルフ場より「3月7日からノーマル・グリーンの使用を解禁する」とのニュースが飛び込んできました。冬季はいたってまじめに冬眠と決め付けている私でも、そろそろむずむずしてきた折、朗報でした。ゴルフ場もこの経済状況の中、今シーズンの収支を心配してなるべく営業期間を長く取ろうという意図が透けて見えるようです。

昨年12月から車庫に3ヶ月間、置き去りにしてあったバッグの埃をはたき、取り出したパターで3回ストローク(素振りのつもり)して、昨年の感を取り戻せたような気がして3月7日に備えました。

当日は強風でした。並みの強風ではなく、押せどもカートは全く言うことを効かず、「動きたくありません」状態が度々ある程の強風でした。3ヶ月強運動らしきことから一切遠ざかり、もっぱら「ワイン飲み人形」と化した私の体には応えました。

考えて見れば、18ホール中アゲンストホールとフォローホールはほぼ同数あるため、計算上はアゲンストの疲れは打ち消されて、無風状態の時の疲れと同じになるはずと 解かったような理論で自問自答しても、体は正直でぼろ雑巾状態の疲れ。翌日の「連ちゃん」の誘いを丁重にお断りして、ヤットのことで帰宅。コースで消費した体力を、ワインで補給するのが精一杯でした。先月2月7日に行われたゴルフ部新年会で、今シーズンは各国対抗戦でも頑張るぞと皆で盛り上がったのは一体何だったんだ。精神と肉体は別物でした。多難な今シーズンのスタートを象徴しているような結果でした。

ここで、新年会の盛り上がり具合の一部を皆様にご紹介します。新年会には女性、新会員を含めて、36名もの部員に参加いただき、次の目的で開催されました。

1.2009年度、新世話役の承認

原案がそのまま承認された。

2.2009年度、ハンデキャップの承認

ハンデキャップ担当より、昨年度の実績から2009年度の新ハンデが発表された。それに対して下記の修正案が出され、承認された。

(1) 2008年度月例会の優勝経験者は、新ハンデから更に1を差引く(厳しく)

(2) 新部員のハンデは自己申告をそのまま適用するとの不文律がありましたが、自己紹介の折、長期海外生活経験者でどうみても90を切ると思われる人が2桁真ん中の申告。全員のブーイングを浴び、あえなく正当と思われるシングルハンデに修正。

3.その他

(1) シニアティー採用の提案があり、提案者とシニア年齢を意地でも自覚したくない人達との攻防の結果、非常に日本的で平和な結論となりました。75歳以上の部員に限りシニアティーを認める(その年齢になるためには最短の人で7-8年が必要)。

(2) ドラコンホールは昨年までの1番と18番から、10番と18番に変更になり、シニアにとっては何れにしても距離は長く、賞から遠いことに変わり無い結果となった。

(3) ベスグロ賞にハンデを加味し、A・Bクラスの2本立てにするという提案もありましたが、審議の結果これは「努力賞」のようなもので、結局1本立てで決着。

「ベスグロを狙うためには家族の批判も省みない不断の努力の賜物」との説得力ある説明に全員が納得。

(4) 「大吉杯マッチプレー選手権」：今年は春季と秋季の年2回で開催して欲しいと

いう提案があり、全員諸手を上げて「異議なし!」

(5) シニア年齢の部員が多いためか、どんな話の切っ掛けで提案があったのか記憶にありませんが、「アラ還コンペ」の提案がありました。ドラマのアラフォーを振って、Around還暦によるコンペだそうで、参加資格は4捨5入で60歳。楽しみです。折角だから、赤色の物を着用しよう。激論の結果、真っ赤なボールでプレーする事となり、直近の日本出張部員に購入を託しました(後日談として赤ボールは捜しだせず、オレンジ色で我慢ということになりました)。

このような盛り上がりの結果、新シーズン直近の大イベントである新年会は終了となり、ルールとハンデが決定し、また部員相互の親睦を図ることができました。

第1回の日本人会ゴルフコンペ(月例会)はパンノニアクラブで3月29日(日)に開催が決定し、本格的なゴルフシーズンがスタートします。

新入部員を大歓迎! 下記アドレスにアクセスしてください。

e-mail: Machino35@gmail.com

釣りサークル: 大自然と魚と毛ばりと私

野村 英陽

ハンガリー赴任を機に、新しいアウトドア・アクティビティの一つ覚えました。フライフィッシングです。釣りの経験がまったくない私が、誰もが通るであろう磯釣り、船釣りを乗り越し、敷居の高そうなフライフィッシングに挑戦することになったのは、2007年夏の事です。当時の釣り部部長に、半ば強制的に連れて行かれたのは、オーストリア中央部Murauでした。標高1000mの山々に囲まれた湖は、表向きは管理釣堀とされていますが、趣のあるログハウス(宿)兼受付が湖畔にあるだけの、人の手がほとんど加えられていないナチュラル純度100%の釣り場です。水の透明度が非常に高く、湖上を進むボートからターゲットの魚影イワナが拝めます。ポイントを絞ることもなく、教わったばかりの慣れない手法で毛ばりを浮かべると間もなく、そのイワナが食いつきます。そして、ロッドをコントロールして合わせることもなく、難なく釣上げることができます。その後も、毛ばりを浮かせては、イワナを巻き上げる、の繰り返し。まさに入れ食い状態です。稀にその湖の主であろうニジマス40cm級がかかるときもあります。ロッドを持っていかれそうなほどの強い引きは圧巻です。さらに釣り上げたときの気持ちは感無量です。当時、初のフライフィッシングで20匹以上の大量釣果となりました。他に初挑戦した方も、入れ食い釣果に大満足していました。我々、釣部員の中では、その湖を爆釣(ばくちょう)の湖と命名し、毎夏釣りを楽しんでいます。釣果レベルが高いがために、笑いが止まらない爆笑の湖と呼んでもよいかもしれません。

ところで、2009年度第1回の釣行が既に決定しています。日程は、5月9-10日(土・日)の1泊2日です。漁の解禁期間は毎年5月から9月まで。今シーズンも夏季を中心に、随時開催していく予定です。ご興味をもたれた方、是非一緒に大自然の中で爆釣・爆笑を味わってみませんか。ご連絡いつでもお待ちしております。部員募集中です。

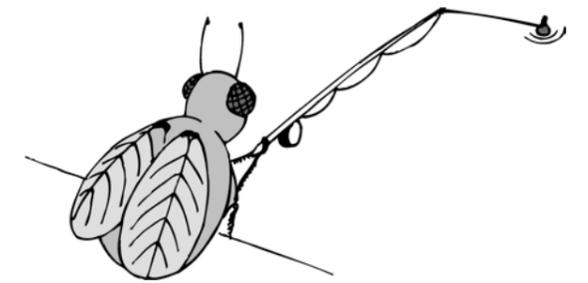
ランニング情報

4月19日には、ウィーンで国際マラソン・ハーフマラソン大会が開催されます。ブダペストからも4名がハーフマラソンに挑戦します。また同じにはブダペストでは、T-HOMEのランニング大会が開催され、日本人学校の参加者を含め、大人19名、児童・幼児31名が3.5kmに参加します。

この後、5月17日には恒例のK&Hのマラソン・ハーフマラソンリレー大会、5月30日にはドナウ河沿岸道路の5kmと10kmのタイムレースがあります。なお、5月16日予定の女子ランニング大会は中止になりました。

これらのレースの後、9月6日がNIKE国際ハーフマラソン、10月4日が国際マラソン大会になります。皆さん、日頃のトレーニングを怠らず、各大会に向けて準備しましょう。

各種大会参加の申込みは、morita@tateyama.hu までお寄せください。



テニスサークル

日曜AMチーム幹事 的場 英門

新年早々に開催したテニス交流会及び新年会について報告させていただきます。

現在、ブダペストでは土曜1チーム、日曜2チームがテニス活動をしており、今回はこの3チームのみなさんが集まり、親睦をメインとした交流テニス大会及び新年会を開催しました。参加者は22名(内女性5名)、4チーム(1チーム:5~6名)に振り分けダブルスによる団体戦を実施。試合形式は各チームのダブルス3チームが3ゲーム先取の試合をし、2勝以上したチームの勝ちとして勝敗を決める。5名チームについては1名を助っ人として休憩しているチームから参加してもらいました(助っ人となった方は休憩無しとなります)。

その助っ人はクジ引きで決めたのですが、普通は試合数を考えるとチーム毎に2回もしくは3回くじを引くチャンスがあります。ですので、当たる確率はクジを3回引いた場合、1回当たるか当たらないかの確率となりますが、クジ運が強いのか悪いのか分かりませんが、3回連続(しかも1回は引く順を自分で指定したにも関わらず)当り?(この場合、当りとは言わないかもしれませんが)を引かれた強運者がいらっしゃいました。休憩無しのぶっ続けテニスご苦労様でした。

さて、試合の方はというと、参加者全員が驚いた経験者揃いのAチーム、チームの平均年齢は少し高いが「技」が持ち味のBチーム、唯一女性2名を要するがチームバランスの取れた、強運者率いるCチーム、そしてどこのチームよりもテニス熱・ハードなテニスを好むDチームそれぞれが持ち味を生かし各試合共に大接戦となりましたが、Cチームがその混戦を見事制し優勝しました。(試合結果の詳細は別表をご参照下さい。)

試合後は某レストランに再集まり新年会開始。

数時間前までハードな試合をし、疲労困憊のはずでしたがそんな事を全く感じさせず、普段、各チーム毎の飲み会は良く開催されていますが、他チームとの交流は今回が初めてという方も多く皆さん時間を忘れ(終了予定時間をはるかに越え)、大いに盛り上がりました。今回の交流会にはいつもよりも多くの方に参加頂き交流を深めて頂き、今後の活動にも弾みがついたと思っています。これからもこのような交流会や飲み会を開催していき、また他のチーム(今回参加されたチーム以外)の方々も含め、更にブダペストテニス活動を盛り上げて行きたいと思えます。

2009年ゴルフコンペ年間予定

◎ 月例会 於 PANNONIA Golf Course

第1回	3月29日(日)	8時30分～
第2回	4月26日(日)	8時30分～
第3回	5月24日(日)	8時30分～
第4回	6月21日(日)	8時30分～
第5回	7月19日(日)	8時30分～
第6回	8月30日(日)	8時30分～
第7回	9月20日(日)	8時30分～
第8回	10月18日(日)	8時30分～
第9回	11月8日(日)	8時30分～

◎ 「大吉杯」ゴルフ・マッチプレー選手権

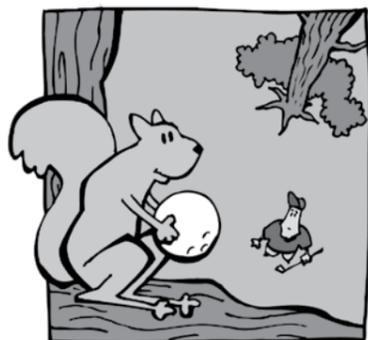
春季大会(第10回) : 4月～6月
 秋季大会(第11回) : 7月～10月

◎ 第5回 WORLD CUP 四カ国対抗戦 (別途通知)

欧州、米国、韓国、日本 各選抜

◎ 第5回 JETRO CUP 四カ国対抗戦 (6月、Wien)

オーストリア、チェコ、スロバキア、ハンガリー 各選抜



月刊メールマガジン

- ・ハンガリーのニュース、
- ・オペラ・バレエ、
- ・コンサート、
- ・イベント、
- ・日本人コミュニティのお知らせなど

登録は無料ですのでE-Mailにてお申し込みください。

Japan Coop Kft.
 1025 Bp, Cimbalom u. 7.
 Tel.: 345-0450 Fax: 345-0008
 e-mail: paprika-tsushin@jpc.hu
 ホームページ: www.paprika-tsushin.hu/

編集部よりのお知らせ



季刊誌『ドナウの四季』は、在留邦人のための情報交換誌です。皆様の原稿をお寄せ下さい。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せ下さい。原稿は、横書き、MS明朝10.5ポイントで、2600-2700字を目安にお書きください。なお、提出いただいた原稿は、表現ならびに形式等の変更を行うことがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしますが、とくにエッセイについては日本語の質を維持するために、修正をお願いすることがありますので、ご了承ください。

原稿は電子ファイルで、morita@tateyama.huへお送りください。なお、EXCEL形式での文書の提出はお控え下さい。

インターネットで人生の楽しさを広げましょう! オトナももっと遊ぶ時代

人生に夢と輝きを BYOOL SNS ~The Best Years Of Our Lives~

BYOOL SNS (Social Networking Service)は、大人が楽しめるユーザー参加型のWEBサイトです。スマートな大人が集まるグローバルな知的空間を目指しています。現在、10ヶ国の海外に住む日本人が参加しており、国を超えて、文化や政治・経済始め、幅広い分野において、情報発信、議論を行なっています。あなたの知的好奇心を満たしてみませんか?

- ★参加方法: 事務局まで参加希望の旨、メールをお願いします。招待メールをお送りします。
 BYOOL事務局 Email: admin@byool.com 「BYOOL Bloggers」 http://www.byool.com
- ★お問い合わせ: 上記事務局アドレスまでお問い合わせください。

<p>日記・エッセイ</p> <p>自分のページを持てる。日記、エッセイ、ブログ、記録として。</p>	<p>コミュニティ</p> <p>同じ興味・関心を持つ仲間との交流の場。OB/OG会にも。</p>	<p>豊かさ・輝き</p> <p>様々な人の意見・情報のシェア。そこから生まれる新しい発見や気づきが、人生を豊かに輝かせるものに。</p>	<p>安心・安全</p> <p>無料会員制。SNSのメンバーだけが利用できるクローズドなサービスなので、安心安全。</p>
--	--	--	--

書き込みはすべて非公開にできますので、スケジュール管理や、何か自分の記録をつけたり、コミュニティをグループの連絡用に使用していらっしゃるメンバーもいます。

BYOOL Selection

BYOOLでは、品質にこだわり抜いた無農薬・有機栽培の緑茶知覧茶・有機緑茶と、コクのある味わいの知覧茶・深むし茶を皆様にご紹介しております。国内でも有数のお茶の産地として知られる鹿児島県知覧町の、全国茶品評会などのコンクールで、上位入賞経験を持つお茶園から、直接取り寄せました。環境に優しく、そして、人に優しいお茶で、心落ち着かす優雅なひとときをお過ごしください。 BYOOL Selection: <http://byool.open365.jp/>



CI、広告、ロゴ、ホームページ等
 名刺1枚からご希望の言語にて
 デザイン致します。
 各種パッケージ、インテリアのデザイン、
 内装工事、翻訳から印刷まで
 幅広く受け承っております。
 お気軽にお問い合わせ下さい。

SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu
 Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.
 Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

www.innerdesign.hu

Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグローバルな企画・マネジメント展開を行っています。お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネージメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ/仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、
 各楽器講師紹介なども随時承っています。

Propart Hungary Bt.
 Address: 1089 Budapest, Kőrös utca 25. II/6
 Tel&Fax: +36-1-786-7846
 Mobil: +36-70-3815548
 e-mail: propart@chello.hu
 web: <http://propart.client.jp/>



コバケンと池田理代子 ヨーロッパツアー

7月8日

コバケンと理代子のディナーショウ
ブダペスト・マリOTTホテルにて、午後8時より
ディナー参加料金 18000Ft
当地申込みは70名定員、4月より予約受付

7月9日

ベートーベン「第九交響曲」
芸術宮殿バルトーク国民コンサートホール
チケット 8000Ft・5000Ft・3000Ftー児童・学生
(4月より受付開始。上席150席限定)

7月13日

モーツァルト「レクイエム」
ウィーン・シュテファン大聖堂
午後8時30分より
5月よりインターネットでチケット販売



ソリスト：池田理代子、鈴木賀子、
浅井隆仁、ムック・ヨーゼフ
合唱団：『真夏に第九を歌う会』
共演：MÁVシンフォニィ・オーケストラ
国立合唱団

チケット情報：morita@tateyama.hu ☎：+36-30-311-5361